



楽庵ニュース 第6号

2011年 8月13日

発行元:NPO 法人茅ヶ崎ユニバーサルデザインスクエア
地域活動支援センター 楽庵
茅ヶ崎市浜竹3-4-64石黒ビル2F

TEL&FAX 0467-86-5898

ホームページ <http://park11.wakwak.com/~rakuan>

メールアドレス rakuan@aq.wakwak.com

*長楽萬年(古代文字):楽しいことの幾久しく限りないこと。

自然のまなこ

写真に撮ろうと季節の花を求めて湘南の海岸や丘陵地域の里山を歩いていると、自然の素晴らしさや自然の癒しを感じると共に、自然との共生の大切さを考えさせられる。

晩春から初夏にかけて湘南海岸の砂浜では、ハマボウフウ、ハマヒルガオ、コウボウムギなどの種々の海浜植物が観られる。ハマボウフウは、5月中旬頃から小さな火花が集まったような白い花を咲かせる。その根は太く砂中に長く伸びている。若葉は刺身のツマ、若芽は酢の物などにされ、また、根を乾燥させたものは風邪の発汗、発熱、頭痛、神経痛などに薬効があるということは広く知られている。このことから乱掘されたのか、かつては海岸の広い地域で群生していたが、今では限られた地域に生息する希少種になってしまった。現在、NPOゆい等の市民団体の人たちの活動によるその復元が期待されている。ハマヒルガオは、群生して初夏に淡いピンクの花を咲かせ、美しい浜辺の景観を造っている。根を砂中に長く引き、地上茎も砂浜を這って伸びるので、飛び砂の発生を抑える役目も果たしている。

また、コウボウムギは晩春から初夏にかけての砂浜海岸の一般的な雑草だ。雌雄異株で、雌花の穂は麦に似ているが、雄花の穂は茶色にススけたこん棒状。その根は十数mにもなり、砂浜の風による砂の移動を防いでいる。コウボウムギが繁殖することにより海浜の砂地は安定化し、他の海浜植物が生育できることになる。雑草と言われながらも他の海浜植物の育成を助けているのは見事なことだと思う。

また八月になって西久保の田圃の中に蓮の花が咲くと聞き行きましたが、残念ながら蓮の花はまだ咲いていない。この田圃で働く農家の人に聞くと、その田圃で穫れた米をタゲリ米ということだ。十一月から二月にかけてタゲリという鳥が北の国から越冬のためにこの田圃に飛来し、その由来からタゲリ米の名称が生まれたとのこと。タゲリは農薬を使った田圃には来ないため、無農薬で米を育てる必要があり、農家の人たちはタゲリの来る田圃を守るため年月をかけて努力して、タゲリ米を実現したということだ。これらの話は、国連でも取り上げている「生態系サービス」と言えるもので、生物多様性はそれ自体も価値を有しているが、多様な生物に支えられた生態系は、私たち人類に多大な利益をもたらしているということだ。



湘南 四季の花

江ノ電柳小路駅の住宅街から少し歩くと、桜小路公園がある。通称は「蓮池」だ。毎年たくさんのハスが咲きそろう。日曜日の早朝から散歩や、電車、バスで訪れる人も多い。(藤沢市鵜沼藤が谷)

摂食コミュニケーション研修会を開催



人生の楽しみは究極のところ、食べること、寝ること、出会うことが大きいと感じます。いのち途絶える日までおいしく食事ができることは生きがいにも通じます。食えることは心身の健康を維持するためにも大切です。

長年「食べられる口づくり」に歯科医の立場で研究してこられた黒岩恭子先生は茅ヶ崎市白浜町で開業されています。現在日本中を回って口腔器官の感覚や運動機能に関しての臨床で得られた知見を患者さんに生かす努力をされています。黒岩先生を中心に茅ヶ崎市内で臨床をしているリハ職とケアマネージャー看護師栄養士当事者家族が集まりお互いの垣根をとりはらい学習を深めています。

一般的には食べる姿勢や食材や食器などの環境的な工夫が必要です。それに加えて発達的な視点での口腔や咽頭などの器官の動きや呼吸との調整などの生理的な観察評価が大切です。八月までに4回の研修会を開催しました。

第一回は黒岩恭子先生の口腔リハの基礎、第二回は近藤裕美言語聴覚士が発達障害と口腔機能、第三回は前田大介理学療法士から姿勢と重力の問題を、第四回は神鳥博道作業療法士から「OTからみた食事行動」という内容での研鑽を深めました。毎回参加者の熱心な意見や感想が聞かれ、茅ヶ崎徳洲会総合病院の言語聴覚士から退院後の患者さんへ訪問したときの生活



環境に配慮した取組みの報告がありました。当事者家族からは、楽しく食事する環境を考えていきたいとの意見が聞かれました。専門職が医学的な観点で障害を評価するだけでなく患者さんの意志に配慮したあり方を生活全体の中で考えていくことの意味を共通理解しました。

今回は茅ヶ崎市内で仕事をしている管理栄養士から栄養という観点での研修があります。栄養をとりあげた背景としては、発達障害が増加している誘因として妊娠中の栄養や食事に問題があるのではないかと懸念があります。浜松医大特任教授の杉山登志朗先生は最近の著書でエビジェネチック（発生後成説）という概念で説明しています。一つの細胞から胎内で分化し、育っていく過程で多因子の問題があるということです。同じように発達障害の素因に関しては京都大学の十一元三先生も脳の神経生理学の観点から発生学の問題を示唆されています。栄養が多因子のひとつであるとしたら何が考えられるのかわかりやすく解説してもらおう予定です。

当事者や家族専門職介護職のお互いの立場の壁をとりはらい、気兼ねなく話し合えるこの研修は続きます。研修成果に関しては、レポートを作成する予定です。

乞う！ご期待！



浜竹の隣町、松浪2丁目では元気な高齢者のサロンを毎月一回自治会福祉部が運営している。

プログラムは社会福祉協議会の職員の声掛けで簡単な体操をしたり、ボランティアとの話し合いや合唱をするなど相互交流をはかる内容だ。この取組みは家に閉じこもりがちな高齢者の参加を促し、健康な生活を地域住民で守っている。健康は個人の病気や外傷などから生じると考える医学モデルではなく社会環境によって作り出すものだという考えの社会モデルの集合体として

考える ICF の実践版だ。年をとって も疾病があつたとして も人生をおくるうえで 自身の生き方ひとつで生活は豊かになる。障害とは機能障害と活動制限と参加制約を包括した概念で



あり、単に身体が動かないとか知的機能の問題といったハンディキャップ（生理的欠損）だけの一方的な判断では障害とはいわないという考え方だ。これまでは、障害を代償、治療するのは、医療サービスであった。ICF（国際生活分類）は2001年に国際障害分類（ICIDH）の改定版として採択された。今は病気があっても高齢であってもそれらを含めてその人らしさとして認めていく考え方が主流だ。社会環境や個人の課題への遂行を含めて専門家だけではなく本人はもちろん家族を含めて健康に関連する状況や障害の状態を共通理解することが可能になった。具体的には保健医療福祉サービスに頼るだけではなく地域の中でその人らしい生き方を自身の選択と決定により可能にしていく環境作りだ。助け合いの輪を広げられるような取り組みをしていくことも大事だ。関係者間のずれを軽減するためにも、ICFの考え方を活用していきたい。

浜竹3丁目自治会の納涼祭も、今年も盛大に行われた。地域の住民が、笑顔で相互交流した。楽庵も作品販売の出店をさせていただいた。



湘南海岸の海浜植物の共生

辻堂海岸には、ハマヒルガオ、ハマボウフウ、コウボウムギなどの海浜植物が、一緒に群生しています。



編集後記

元神奈川県新聞カメラマンの茂木春樹さんの写真の素晴らしさに魅せられ、これまで2年間楽庵ニュースを発刊してきました。

今回もたくさんの写真の中から適切な映像を選んだ、北脇和夫さんには印刷機の色特性に合わせて色校正をしてもらいました。さらに多くのボランティアの方々の支援のおかげで楽庵ニュースができています。

地域活動支援センター楽庵にとってこの多彩な人材こそが宝だと感じています。

今年も茅ヶ崎北陵高校の在校生に対する進路指導の講演会に昨年に続き講演者として、昨年の楽庵講演会「新たな出会い」で司会を務めた水季可奈さんが選ばれました。とてもうれしいニュースでした。

この人 浜竹3丁目自治会長
中嶋 隆夫さん



平成23年3月11日に東北大地震がおき私たちの自然災害に関する思いは一転した。国民としてだけひとりこの不幸な災害を他人事のように思った人はいないと思う。余震がくるたびに湘南にも起こっても不思議のない被害を予期したものだ。茅ヶ崎市はJR辻堂駅から茅ヶ崎駅の南側は海岸から3キロの平地には閑静な住宅街が広がる。建築基準も低層で大きな鉄筋のビルも少ない。津波ハザ

ードマップをみれば液状化の被害予想がでている。地域のコミュニティの存在も今回の災害でクローズアップされたキーワードだ。中嶋さんは地域活動支援センターの理事として活躍される一方で浜竹3丁目自治会の会長を務めている。楽庵での取材で人となり語ってくれた。中嶋さんが浜竹3丁目に引越越されたのは昭和14年満一歳のときだったらしい。周囲は田んぼや畑、丘や茅の原だったようだ。松林小学校へは4キロかけて登校した。特に戦時中は空襲警報がでると4キロを泣きながら一時間かけて歩いて自宅に戻り庭の防空壕に逃げた経験を持つ。辻堂駅北口にあった関東特殊製鋼の工場では当時兵器の部品を作っていて空襲は工場を目標によくあったらしい。

大きな災害も戦後の食糧難も両親や親せきの庇護のもとで大きな不安なく育ったらしい。一年生で終戦となりその後成人してからは転職の多い職業で33年間は神奈川県外で過ごした。地域活動に入るきっかけは久しぶりに会ったお母さんへの思いだったらしい。

地域の防災への取り組みも率先して動いている。災害時要援護者支援制度だ。災害がおきたとき高齢者や重度の障害者などを支えるための仕組みだ。登録を希望するには登録申請書を提出することになっているが日頃から地域での夜間巡回や地域の公園での祭りを企画して地域のひととの交流をお互い支えあうような関係を築く努力をしている。浜竹3丁目には36名が登録していて、ふだんから郵便受けに新聞がたまっていないか、戸が閉まりつきりになってないか、など近隣の市民が見守り支援をしている。

自治会活動の目標のひとつは「歳取っても安心して

住める地域にする」だ。日中の防災犯バトロール、こどもの登下校の見守りをしていくうちに「助かります」と挨拶をしていく近隣の人が増えてきたそう。

もうひとつの活動は法的な制度や介護保険のはざま

でなかなか行政サービスの恩恵にあずかれない人の支援やその支援事業を開拓するボランティアセンターの仕事だ。これはコミュニティの大きな柱になると思った。慶応大学の金子郁容教授の説く「コミュニティインイノベーション」であると感じた。金子郁容先生は「コミュニティインイノベーション」とは「地域コミュニティの関係者が自分のことだけではなく、他の人や他の家のことも考える、いい地域を作るために一緒に社会的活動をしてソーシャルキャピタルの高いコミュニティを作る。このことで当事者たちが地域の問題を自分たちで解決していくアプローチのことをいう」と述べている。浜竹3丁目の課題を現場で把握して、個々のニーズにあったアプローチで問題解決を住民自身で図るリーダーとして中嶋さんの存在は大きい。楽庵の理事としても地域にあった活動内容を具体的に提言の形ではかって頂いている。地域住民の中嶋さんへの期待は図りしれない。

